
憑物語～ツキモノガタリ～

天タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑物語〜ツキモノガタリ〜

【Nコード】

N7599M

【作者名】

天タカ

【あらすじ】

元風紀委員委員長、霧妻 八風、元風紀委員、駒継 天。

夏休み明けに阿良々木 暦が直面する

圧倒的なまでの二体の暴力とは!?

青春につかれてしまうのは当然だ。

はかせキッド（前書き）

少し変えてみました

はかせキッド

001

こまつくたかし

駒継天の内面を語ることは非常に難しく、また混沌としているが、表層を語ることにしては至って簡単である。

分け隔て無い態度。作り笑い。嘘つき。友達がいない。明るい。ヘッドホン。他人を信用していない。

もしクラスの皆に駒継天についてのアンケートを取った場合、恐らくクラスの九割近くの間人がそう答えるに違いないと断言できる。あまり良いイメージを抱かれないようにも感じなくもないが、彼のことを嫌っているクラスメイトは多くはない。不思議と逆に、少ないぐらいだと言える。だが決して皆に好かれているわけでもないというのがおもしろいところだ。

他人の中に決して深くは踏み込んでこず、何時も分け隔て無い態度で、気持ち悪いほど明るく、とりとめもなく、馬鹿な話しかしてこない——そんな存在。

それが駒継天である。

友達や親友、恋人といったような深い関係に進んでなろうと思わないが、だからと言って決して付き合い合い難い訳ではなく、寧ろ付き合い合い易いというのが彼のクラスにおいての立ち位置だ。

天も天で誰かのことを特に嫌っているというわけでもなく、いや、本当のところはよくわからないが、天はそういった態度をクラスの皆に一切、微塵も、徹底的なまでに、徹頭徹尾、一種の気持ち悪さを感じてしまうくらいに表に出さない。

ついたアダ名が『大嘘ツツキ』。

もはや生きながらにして、生きていくだけで周りの人間に嘘をつく天を見たクラスメイトの一人が軽い気持ちでつけたアダ名だ。

その妙なリズム感からクラスで一氣に広がり、一瞬で定着してしまった。

そんなアダ名に対し、天は一切何も言ってはこず、ただ面白いアダ名だね、と何時もの作り笑いを浮かべて、まるで他人のこのような感想を述べるだけだった。

ある日クラスメイトの一人がそんな天に、どうしてそんなに嘘をつくんだ？ と訊いたところ、彼は至って普通に、当然のように、流れるまま、ごく自然にこう答えた。

「うーん……、別に何となくかな！」

特に理由はないらしい。

確かに理由なく嘘をつく人間はいるかもしれないが、理由がないのに常に嘘をつき続ける人間というのも中々珍しいものだった。

成績の方は至って普通。

全体平均の少し上か、またはそれよりまた少し上程度。

特に問題視されるようなものではないし、だからと言って決して褒められたり、驚かれたりするような点数ではない——ごくごく普通な、至極真つ当な成績である。

生活面においても、特に問題はなく、無遅刻無欠席。これと言って指摘することはない。元々風紀委員に所属しているところからすると、その行動は正しいとは言えないまでも良い方ではある——そんなどこにでもいる、ありふれた高校生。

戦場ヶ原ひたぎのように妙な存在感があるわけでもなく、神原駿河のように絶大なスター性があるわけでもなく、羽川翼のように化物であるわけでもなく、

かと言って阿良々木暦のように落ちこぼれてもいない。

そんなごく普通で自然な高校生——それが駒継天なのだ。

ここでそのようなどこにもいる高校生である駒継天の特徴を述べるとするならば、モジャモジャの天パと、何時なんどきも肌身離さず首に引っ掛けているヘッドホン——又はそのヘッドホンから音漏れする曲である。

あまり見かけないフォルムをしたあまりにゴツいヘッドホンは、天曰く、自作だとのこと。（しかし、皆、天が大嘘つきであり、又はヘッドホンを自ら作るような人間には見えないため信じてはいない）

その自称自作のヘッドホンから流れる曲はあまりにマイナーなためか、クラスの誰一人としてその正確な正解を言い当てた者はいない。あの羽川ですら解らなかつた程と言え、かなりマイナーな曲であることは理解できるだろう。

更に天の特徴を挙げるとするならば、桐妻八風きりつまはかせとの関係だ。

他人を他人とも思っていない、感情を感情とも感じていない、心を心とも信じていない、そんな天にとって唯一と言っても過言ではない、というか最早唯一の人間らしい関係うしきものを築いているのが桐妻八風だった。

桐妻八風。

元風紀委員委員長にして、学園のアイドル的存在。

神原がこの学校にとってのスター的存在であるならば、八風はこの学園のアイドルなのだ。

皆からはクーデレ委員長と呼ばれ、男子の中にはコアなファンも多く、わざと風紀を乱すことによって故意に怒られようとする生徒もいるほどだ。

それほどまでに男子から絶大な人気を誇るところから推測されることだろうが、かなりの美人である。男子十人が彼女を見れば、おそらくその十人が十人、彼女のことを美人と答えるぐらいの八方美人。

身長は一七十後半の後半ぐらいと、女子からすればそれなりに高身長。スタイルも良く、成績は優秀で運動神経もかなり良いらしいといういろいろとパーフェクトな女の子なのである。

性格はクールに装おっているが素は基本恥ずかしがり屋。

大勢の前に立てば、恥ずかしくて何も喋れなくなってしまううそんなごくありふれた恥ずかしがり屋なのだ。

彼氏はいないらしく、というかそもそも告白すらされたことがないらしい。理由も簡単で、告白される寸前にそのあまりの恥ずかしさに逃げだしてしまうからだとか。

しかしながら正義感は一倍感強いらしい、三年間風紀委員に所属していることからそのことが窺える。

そんな性格が相成ったのか、かなりのがんばり屋で、何よりも真面目だった。しかし彼女がかなりの不器用な部分もあってか、その頑張りも大概は空回りしてしまい失敗してばかり、その後顔を真っ赤にしながら事の顛末の後始末をしている姿を良く目撃されている。

そんな八風が一体どうして風紀委員委員長になってしまったかといえ、もつと頑張つて欲しい、という悪意丸出しの推薦を他の風紀委員のメンバーが次々と挙げ、もつと頑張っている姿を見たい、という下心丸見えの全会一致で承認されてしまったため。

そんな彼女と駒継天に一体どのような関係があるかということ、やはり風紀委員繋がりとと言える。

そもそも駒継天が風紀委員に入った理由が八風が風紀委員委員長を務めるに当たって、彼女が提示した条件の一つに駒継天が風紀委員に所属すること、というものがあつたためである。

この出来事よってに生徒の間に凄まじいほどの衝撃が走る。

もはやそれは前代未聞の重大事件であり、他に類を見ないほど稀に見る珍事件だったためである。その事件を始めに学校は少し荒れることになるのだが、それはもはや別の物語となつてしまったため割愛させていただく。

まあ、そのようなありふれた、ごく普通の、どこにでもいるような高校生——それが駒継天だ。

戦場ヶ原ひたぎはそんな駒継天と出会ってしまうことになる。

时期的には三年生一学期が始まった直後、更に詳しく言うならば、春休みが終わり、クラス替えが行われ、始業式が開かれたその翌日——まだ阿良々木暦とは恋人どころか、会ってさえおらず、まだ蟹

の怪異も一切解決していない、というかもはや怪異という存在すら
本当のところ理解していなかった——そんな時。

戦場ヶ原は駒継と出会ってしまった。

出遭ってしまった。

それによって戦場ヶ原は知ってしまうことになる。

駒継天が自分以上に異常な存在であることを。

はかせキッド

002

「駒継くん？」

羽川 翼は阿良々木 暦の問いかけに首を傾げる。

「駒継くんがどうかしたの？」

「いや、どうしたってどうか——」

暦は曖昧に言葉を濁した。

「てゆうか、こんなやり取りを前にやった気が——」

「確かにやったわね。あの時は戦場ヶ原さんのことを聞いてきたんじゃないかったかしら？」

「スゲエな、オイ。まさか覚えてるなんて……、正直な話、お前じやなかったら引いてるよ。まさかお前、今までの会話全部覚えてるわけじゃないよな？」

「まさか、そんな訳がないでしょ」

恐る恐る聞く暦の問いにさも当然のように否定する羽川。

しかし実際に羽川なら覚えていても不思議ではないのが恐ろしい所だ。

羽川 翼。

暦と同級生で——クラスメイトである。

学年トップの成績どころか、全国模試でもトップを取ったことのある、化け物のような天才である。

羽川は暦のクラスでは委員長を務めており、そのルックスはまさしく委員長の中の委員長、眼鏡に三つ編み、前髪を揃えて如何にも優等生然としたもの——だったのは文化祭までのことである。

文化祭が終わって。

羽川は髪を切った。

肩口で揃えて、前髪にもシャギーを入れた。

眼鏡はコンタクトに替えて、学校指定の鞆にアクセサリーをつけたのである。

本来であるならばそんな大した変化でもないのだろうが彼女の場合はそのではない。

大きな変化――

突然地球が逆回転しはじめる、くらいの大きな変化である。

その理由は失恋であり。

その原因は暦であるわけだが。

羽川は髪を切る事でそれらについてのけじめをつけた、と言っべきだろう。

そして現在。

羽川の『いめちえん』からだいぶ経ち、夏休みが明け、課題テストが終わった九月十日。

そんな羽川と暦は学校の放課後、図書館にて向かい合う状態で受験勉強をしていた。

「で？ 駒継くんがどうかしたの？」

羽川は暦の問に小声で聞き返してきた。

「気になるわけ？」

「僕にそんな趣味は断じて無い」

ピシヤリとそれを否定する暦。

当たり前だ。阿良々木 暦はそのようなマニアックな趣向は持ち合わせてなどいない。

「まあ、そうよね。でもそうじゃないならどうしてそんな事聞くの？」

意外そうな顔をしながら首を傾げる羽川。しかし、そんな顔と仕草とは反対に彼女の目には真剣さが伺える。

「えと……、ぶっちゃけると僕じゃなくて、戦場ヶ原が気になるらしいんだよ」

暦はそんな羽川の問に少し迷ったような顔をしたが、羽川相手に隠しきれはしないと判断したのか素直に答える。

「戦場ヶ原さんが？ 阿良々木くん以外の男子に興味を持つなんて随分と珍しいわね。まさか破局？」

「んな訳ないだろ」

「ま、そうでしょうね」

羽川はからかうように笑う。

「ま、だいたい予想はつくけど、どうせ怪異なんですよ？」

「ご明察……」

暦は少しも驚くことなく素直に認める。

暦はこんな事ではもはや驚かなくなっていた。羽川は異常なまでに鋭い人間なのだ。彼女の前では少し喋っただけで全てがバレてしまう。

「そういうことなら答えるけどね……正直な所私、今の駒継くんについては、何も知らないわよ」

「マジで？ お前なら何でも知ってる思ったんだけどな」

「言ったでしょ、何でもは知らないわ、知ってることだけ」

そんな風にいつものやりとりをする二人。

「そうね……それでも答えるとするなら『明るい人』でしょうね」

「明るい……ね」

暦は曖昧に頷きながら少し考え込むように視線をずらす。

（確かに……あれを明るいと言うならば明るいと表現できるのだからうけども）

（何かが違う。どこかが違う）

「正直な話、あんまり好きじゃないのよね……駒継くんのこと。むしろ嫌いと言っても良いかな」

「ん？」

暦は遠くを見るように答える羽川に素直に驚いた。

面倒見の良い彼女が自ら進んで誰かのことを嫌い、なんて言うとは思わなかったからである。

「私だって人間よ。好きな人だっているし、嫌いな人だっているわ。ま、確かに嫌いになる人なんて珍しいっちゃ珍しいんだけどね」

好きな人――

嫌いな人――

「そういう意味じゃ私より阿良々木くんのほうが詳しいじゃないの？　だって三年間同じクラスだったわけだし、あの時の戦場ヶ原さんとは違って、駒継くんって誰とでも分け隔てなく接してくる人でしょ。阿良々木くんだって少しは喋ったことあるんじゃないの？」

「いや……たしかにあるんだけどさ」

目線を明後日の方にずらし曖昧に誤魔化す暦。

「覚えてないのね」

「私だって覚えてるのに」

「お前が凄すぎるんだよ！」

ズバツと暦は羽川にツツコム。

（やっぱり覚えてるんだな……コイツ）

「でも、何か駒継くんの分け隔ての無さってのは少し違和感があるよね。ただ人なつつこいってわけじゃなさそうだし、何ていうか不気味なんだよね……気持ち悪いっていうか」

その感想はまさしくあの忍野メメが羽川に言っていたことと全く同じであることに暦は気づく。

（それはつまり……羽川が駒継のことを嫌ってる理由って、同属嫌悪ってわけなんじゃ……）

そんなことを考えている暦に更に羽川は言葉を続ける。

「戦場ヶ原さんだって喋ったことがある筈じゃない。昔に較べて話しやすくなったし、綺麗だから男子には人気があるから駒継くんだって話しかけると思っただけ……」

そんな羽川の問に暦は肩を竦めて、少し呆れたように答える。

「ああダメダメ。戦場ヶ原のヤツも駒継のことは嫌いって言ってし、聞いたところによると戦場ヶ原、駒継が話しかけてきても基本無視してたらしいし」

「ふうん」

と羽川は特に何の感想もなしというかのように曖昧に頷いてから更に言葉を続ける。

実際の所、羽川はそうではないかと軽い予測はついていたのである。

「やっぱりか……。戦場ヶ原さん、駒継くんのこと好きではないと思っただけとそこまでとはね」

「ああ……。まさしく底だな」

「別に上手いこと言えちゃいないわよ」

ピシヤリとツツコム羽川。

「たぶん戦場ヶ原さんのは同属嫌悪だと私は思うな。だって似てるもん、昔の戦場ヶ原と」

同属嫌悪はお前だと暦は思ったが、羽川のそんな言葉を聞いて、少し考えてみる。

昔の戦場ヶ原――

蟹に出遭い、重さを持っていかれ、いつも無表情な戦場ヶ原。

確かに以前の戦場ヶ原の無表情と駒継の作り笑いは全くの同じものなのだろう。

似て非なるものだが、内面を隠すという属性は同じ――

駒継も怪異でそうだったのか

以前からそうだったのかは解らないにしても。

「そうか……。羽川が知らないんじゃないかな。事前に駒継について何か情報があった方が良さそうだと思うんだけど、こうなったら後は本人に聞くしかないな」

そう言っただけで話を終わらせようとする暦に羽川は、「待って」とそれを留める。

「確かに今の駒継くんについて私は全然知らないけど、昔の駒継くんについてなら知っているわ」

羽川は少し俯きながら、言いにくそうにそう言った。

「たしか、同じ中学だったんだよね？」

それは駒継を戦場ヶ原から聞いた時に話していた情報だった。

「今度はちゃんと知ってたんだ」

目を丸くして少し意外そうに羽川は言う。

「ふふん。同じミスは二度としないのだよ」

さも自慢気に喋る暦。

だがそれを戦場ヶ原から聞いていた時点であまり自慢できる事ではないだろうけども。

「クラスは違ったんだけどね。ま、いろいろと噂をね……」

「噂？」

暦は羽川の言葉を聞き返す。

以前戦場ヶ原の話聞いた時には噂ではなく、話と言っていたことを思い出す。

更に暦が気になっているのが羽川の状態だ。まるで言い渋っているような、言いたくないような――

「うん、噂……。聞いた所によるとね、駒継くん、苛めに遭っていたらしいの」

苛め――

（じゃ、駒継は苛めが原因で怪異に……？）

「苛められてた理由は？」

駒継についてある程度の予測をつけながら羽川に質問していく。

「疫病神」

「は？」

羽川の答に思わずそんな声をあげてしまう暦。

「うん、だからね、皆彼のことを疫病神だって言っただけで苛めてたらしいの」

疫病神――

確かにまさに怪異って感じだが、普通そんな理由で苛められるような事があるのか

「実際にね、駒継さんの近くでは少なからず不幸なことが起こってたの。野良犬が追いかけてきたなんて小さな不幸から、交通事故に巻き込まれたなんて大きな不幸まで、それはもう冗談みたいだね」
(何だよそりゃ……)

暦は困惑していた。確かにそのような不幸の数々は怪異とも判断できる所ではあるが、まったくもって違うともとれるような事だった。

吸血鬼に襲われたのでもなく、
蟹に出遭ったのでもなく、
蝸牛に迷ったのでもなく
猿に願ったわけでもなく
蛇に巻かれたわけでもなく
蜂に刺されたわけでもなく
鳥を取り込んだわけでもない。

ただの不幸――

「実際ねそれは苛めっていう名の皆の皆の懇願だったんだと思うよ。『死ぬ』とか『学校に来るな』とか『居なくなれ』とか。だって恐いでしょ。そんな不幸にも巻き込まれたらって考えるとさ……。馬鹿馬鹿しいかもしれない……。くだらないかもしれない……。冗談みたいかもしれない……。でもね阿良々木くん、それぐらいに彼は――駒継くんは不幸だったんだよ。それはもう私のクラスまで噂になるくらいだね」

羽川は俯きながら喋る。

何故羽川があんなに言いたくなさそうにしているのか、言い渋っていたのかわかったような気がした。

確かにそれは暗すぎる。

ちよつとした好奇心で聞くにはそれは暗すぎた。

駒継と戦場ヶ原の属性は同じだとは言ったが、過去はまったく

言って良い程に違っていた。

戦場ヶ原の過去が栄光の光と例えるなら、駒継の過去は暗雲という闇だった。

「羽川は助けてやらなかったのか？」

暦がそう聞いたのは純粹に彼女なら本当に助けていそうだと思うたからであり、羽川への嫌味では決してない。

「苛めってさ、そんな簡単な話じゃないでしょ。苛めを解決しようとして逆に苛めが酷くなるなんて可能性もあるし、苛められる原因が特殊過ぎるでしょ？それに私がどうにかしようとする前に解決したみたいだし」

「え？」

その意外過ぎる言葉に暦は一瞬聞き間違えたのかと思い、声をあげる。

「隣のクラスにさ桐妻きりつま八風はかせっていう人がいるのは知ってる？」

「たしか……元風紀委員の——」

「委員長だった人だよ。凄く正義感が強い人でね、中学校でも風紀委員に所属しててさ、駒継くんを苛めてる人達を一網打尽にしちやったわけ」

「それはなんとも雄々しいってゆうかなんてゆうか……」

「それでね『コイツの面倒はあたしが見る』宣言をしてからは苛めはとりあえず終わったわけ」

「なんとも猛々しいな、オイ」

今時そんな正義の味方みたいヤツがいるもんだな、と暦が言うと羽川は何とも言えない顔をしながら、「そうとも言えないみたい」とそれを否定した。

「どういうわけだ？」

「そもそも八風さんもね、元は駒継くんを苛めてた一員ってというかチームのリーダー格ってというか、チームにとっての核だった人らしいの」

「はあ？ 何だそりゃ？」

暦は意味不明だというようにそんな言葉を口にする。

実際暦は理解できなかった。苛めのリーダー格であったヤツが一体何様のつもりで助けたというのだ、と。

「私にもわからないわ」

羽川もそんな暦の顔を見て、肩を竦めながら言った。

「まあ、でも二人の間で何かあったのは迷惑よね」

「明白な……。何でそんな小ボケを……。やるならもっと笑えるのをだな」

「あら？ 沈みがちな雰囲気的底上げするには中々良いでしょ？」

羽川はくすくす、とからかうように笑う。

「いや、ま、そうだな。まあ、苛めの話はとりあえず良いとして、他にどんな噂があつたんだ？」

「たとえば……。妹を自殺に追い込んだ、とか」

「……………」

暗かった。

話を転回させたにも関わらず暗かった。

さすがの暦もこれだけ暗い話が続けば思わず沈黙してしまう。

「真偽の方は定かではないわ。でもそれが苛めを更に加速させたのは間違いないわね。実際に彼の妹さん、自殺してるらしいし、それが原因で両親からは勘当を言い渡されたらしわ」

「勘当って……」

「一応、仕送りはされてるらしいけど、駒継くん、それから家を離れて一人暮らしをしているらしいわ。まあ、それも真偽の方は定かではないけどね」

暗い話題だった。

てゆうか暗過ぎる話だった。

「てゆうか何なんだ、ソイツ？ この現代社会においてそんな暗く、壮絶な過去を背負ってるヤツがいるものなのか？」

暦は少し声を大きく話してしまう。

「阿良々木くん、少しトーン下げて……」

「あ、ああ……悪い」

「まあ、でもその気持ちも解らなくもないかな……。普通あり得ないもんね、そんなの。でも、あり得ても不思議じゃないんじゃない？ 私達は知ってる筈よ。そういうのを」

そういうの――

羽川が言いたいのは、つまり――

「その不幸に怪異が関わってる、か……」

(……でも)

と暦は考えてしまう。

不幸ってのは皆が皆、平等に持っているものであり、どんな幸運に見えるヤツでも、それに見合った不幸があるものだ。

たしかに、この不幸は常軌を逸しているけれどもその不幸を怪異と断定してしまつて本当に良いのだろうか。

そして今の話には現在の駒継とは一致しない点がある。

「でもさ羽川……。僕は三年間駒継と一緒にクラスだったけど、アイツがそんな不幸だなんて聞いたことも無いし、そもそもそんな目に遭っている駒継を見たことがない」

そう――それこそが暦が感じていた違和感だった。

三年間――三年間も同じクラスだったのにも関わらず、暦はそんな不幸な駒継の噂すら一切、微塵も、少したりとも、聞いたことがなかったのだ。

「だから言つたでしょ、阿良々木くん。私は今の駒継くんについては何も知らないの」

「ああ……」

そんな羽川の言葉に暦は納得する。

どうして羽川がそんな回りくどい言い方をしていたのか。

違っているのだ。昔と今の駒継が。

しかも更にその不幸な話を怪異のせいだと決めつけられない決定的なものがあつた。

それは戦場ヶ原が昨日話していた駒継の話とその不幸の話とでは、

その性質が異なり過ぎていたためである。

（結局は何も解らないまま……か）

むしろ解らない事が増えたと言っても良い。

「フウ……」

思わず溜め息をついてしまう。

そりゃ、これだけ暗い話を聞いたいて、何も解らないんじゃ溜め息の一つでもつきたくはなってしまう。

「ワリイ、羽川。ちょっと外で休憩してきてもいいか？」

羽川は一瞬キョトンとした顔をするが、直ぐに理解したのか優しい笑顔を向けてきた。

「良いよ行ってきた。こんな暗い気分で勉強したって集中できるわけがないし、勉強ばかりじゃつらいだろうしね。ちょうど良い気分転換になると思うしね」

「おう、悪いな。帰りにジュースでも買ってくるけど、羽川何が良い？」

「うーんと、じゃ阿良々木と同じで」

「後悔すんなよ」

「後悔は後でするものなんだよ」

そんなやり取りをしてから暦は席を立とうとすると羽川が、「ちよつと待って」とそんな暦を制した。

「どうしたんだ？ 羽川」

「気分転換と言えばさ、今度映画でも見に行かない？」

（映画……ね）

「時には休憩も必要だしね。阿良々木くんって『借り暮らしのアリエッティ』って見た？」

「えーと、あの小人の女の子の話だよな。いや、まだ見てないけど……」

暦のその言葉を聞いていつきに羽川は明るい表情になる。

「良かった。で、どうかな？ 阿良々木くん」

「ああ……考えとくよ」

そう言って今度こそ席を立つ。

（てゆうか、これってまさか考え過ぎかもしれないけど……デートの誘いなのか？）

自然と昔の戦場ヶ原の姿が脳裏を過る。

考えたくもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599m/>

憑物語～ツキモノガタリ～

2010年10月8日13時55分発行